

議論のルール

過日、私の友人からメールがあり、フィンランドの子ども達が作った議論における10のルールの紹介があり、日本の政治家や文化人と称する方々に教えてほしいものだとありました。

議論というと、田原総一郎氏の「朝まで生テレビ」やNHKの「日曜政治討論」を直ぐに思い起こしますが、あれが、望ましい議論・討論の姿なのかというと、多少疑問です。

特に、「朝まで生テレビ」に至っては、とにかく自分の考えを一方向的に言い合っているだけで、自分のパフォーマンスの場と勘違いしているのではと感じてしまいます。

相手が発言しているのに、その発言を遮る、果ては司会者までが自説を展開して憚らぬというのでは、まともな議論になるはずありません。格闘技を見ているようで面白い、という人もいるかも知れませんが、議論のための議論をただ面白がるというのでは、建設的とはいえません。

議論するというのは、あるテーマについてそれぞれの考えを出し合い、話し合う中で一定の方向性を見出すために行うものです。従って、議論を効果的に行うためには、議論に参加する者にも守るべきルールというものがなければなりません。

例えば、相手の発言を無視したり、居丈高に攻撃する、更には発言者を馬鹿にした態度を取るといったようなことは、建設的な議論になるはずもなく、最低限避けなければなりません。

日本人は議論が下手と良くいわれますが、その一番の理由は、議論に感情が入ってしまうことではないかと思えます。そのため、話し合いの場であるにもかかわらず感情的になり、議論が喧嘩のようになってしまったり、気まずい雰囲気になってしまおうということがしばしば起こります。

議論の場での発言は、飽くまでも与えられたテーマに対する意見であり、その発言者の人格とは本来別物のはずですが、どういう訳か混同しがちです。そのため、自分の発言が否定されたり、反論されたりすると、まるで自分の人格

まで否定されたような感覚に陥ってしまうのではないのでしょうか。

勿論、世の中、急速に国際化・グローバル化が進展していますので、「日本人は議論が下手」で良いわけも、済まされるはずもありません。我々日本人も、論理的にものを考え、それを表現できる力を身に付け、建設的な議論ができるようにしていく必要があります。

それでは、フィンランドの子ども達が作った議論における10のルールというのは、どういうものなのでしょう。

- 1 他人の発言を遮らない
- 2 話すときは、だらだらとしゃべらない
- 3 話すときに、怒ったり泣いたりしない
- 4 わからないことがあったら、すぐに質問する
- 5 話を聞くときは、話している人の目を見る
- 6 話を聞くときは、他のことをしない
- 7 最後まで、きちんと話を聞く
- 8 議論が台無しになるようなことをいわない
- 9 どのような意見であっても、間違いと決めつけない
- 10 議論が終わったら、議論の内容の話はしない

この10のルールをご覧になって、どのような感想を持ちますか。恐らく、「なんだ、特別のことは何もないな」と感じた方も多いと思います。しかし同時に、我々が普段行っている議論について見ると、このごく当たり前と思われることも意外にできていないことが多いと反省させられます。

議論が議論として成立するためには、特別のルールが必要なのではなくて、相手の発言をしっかり聞き、自分の考えを良く整理して発言するということに尽きるということです。ということは、議論が下手な日本人でも訓練次第で上手になるということでもありますので、学校教育の場においても、ディベートを旨く活用するなどして、将来の日本を背負っていく子ども達に論理的にものを考え、発言する力が身に付くよう、積極的に取り組んでいただきたいと思います。（塾頭 吉田 洋一）